モデルプログラム（2017 年度版）を活用した授業・研修事例

現職教員の研修　No. 3

外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA

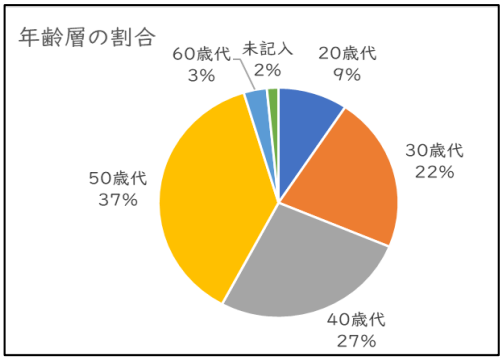
検証実施機関（団体）：豊橋市教育委員会
豊橋市教育委員会　外国人児童生徒教育相談員　築樋博子

1　検証対象の研修・授業について　（該当するものにチェックを入れてください。）

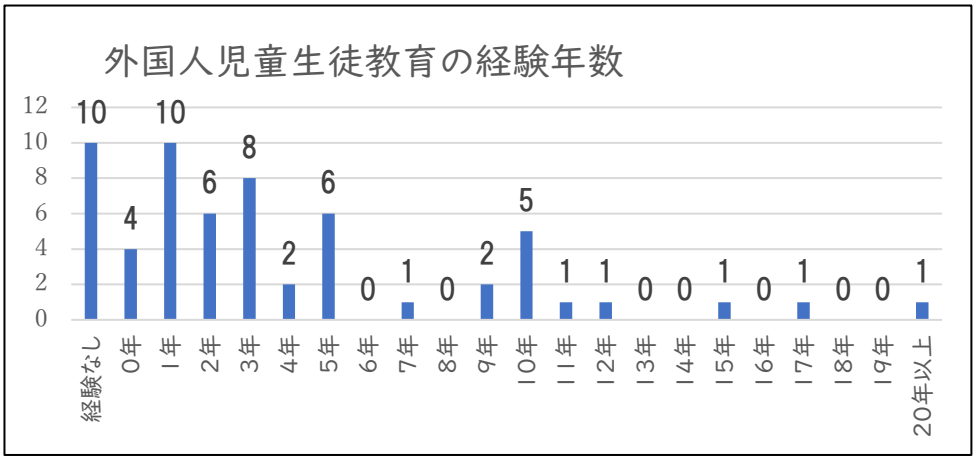
養成／研修	□養成　☑研修
タイプ	☑基礎教育　☑専門教育　□支援員教育
研修・授業日	H30 年 7 月 23 日
総時間数	時間（３時間×１回）
研修・授業科目名	外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA
受講者	人数（参加人数　約 70 人：アンケート回収数 64）

【年齢層】：

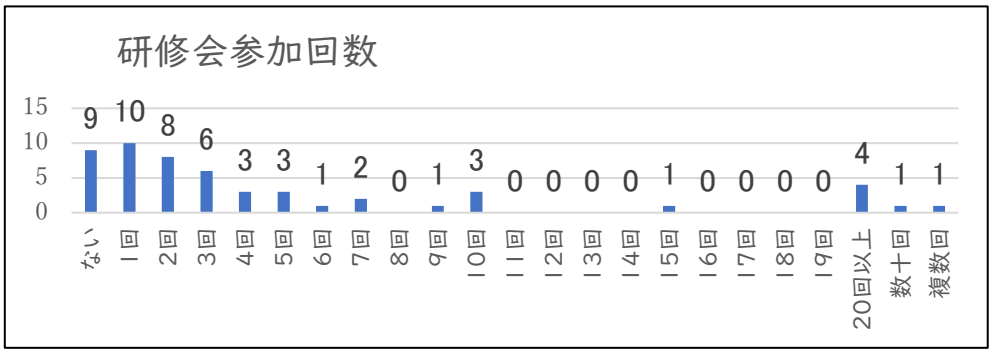
1　20 歳代　6 人
2　30 歳代　14 人
3　40 歳代　17 人
4　50 歳以上　24 人
5　60 歳以上　2 人
記入なし　1 人



【外国人児童生徒等教育の経験】：



【研修会参加回数】:



２　地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

（１）当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

■日本語指導が必要な外国人児童生徒数の言語別内訳

母語	ポルトガル語	中国語	フィリピノ語	スペイン語	その他	合計
小学生数	４９４人	５７人	３０９人	６３人	８２人	１００５人
中学生数	２３８人	３７人	１４９人	１７人	２０人	４６１人

■日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数　　３２７人

（２）当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

・外国人児童生徒指導のための教員加配数　７３人･･･（常勤のみ）

①愛知県による支援体制

ア．日本語教育適応学級担当教員の配置

・小学校２２校に４４人（＋再任用１２人）

・中学校１２校に２９人（＋再任用１０人）　　合計９５人

イ．愛知県語学相談員による巡回訪問指導（ポルトガル語・スペイン語各１名）希望校のみ

②豊橋市による支援体制

ア．外国人児童生徒教育相談員１９名による巡回（１２名）または常駐（７名）による日本語指導補助及び教育相談及び通訳・翻訳

※このうち７名は日本語相談員、１２名はバイリンガル相談員

※この中からコーディネーターとして日本語・バイリンガル相談員それぞれ１名を市役所に置く。

イ．外国人児童生徒スクールアシスタント５名による常駐校での日本語指導補助及び通訳・翻訳

ウ．市登録バイリンガル３４名（有償ボランティア）による初期支援及び通訳派遣

エ．来日間もない生徒のための初期支援校「みらい」での日本語集中指導（１６０単位時間）

※在籍校からの８週間の通級　１日５単位時間×４日間×８週間

オ．外国人児童生徒相談コーナー・にほんごリソースルームの設置（豊橋市役所内）

（３）外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む)、支援員の教育力の課題

・外国人児童生徒の在籍数の増加と共に日本語教育適応学級担当教員も増加しているが、指導者の力量向上のための研修会の機会が非常に少ない。
（多忙化解消の観点から研修会は１回、初心者研修は２回）

・経験豊富な指導者と初心者とが混在する研修会の場合、双方のニーズに対応することが難しい。

３　研修・授業の成果について

（１）（受講者アンケートより）

①受講者の研修への期待　（アンケートのＩより）

受講者の研修への期待は大きく以下の２点である。

・日本語能力（DLA）の評価法と活用の仕方

・指導方法（よりよい指導方法／初期指導／教科指導／具体的な指導方法など）

【DLA の評価方法について】

・DLA の評価について
・DLA について
・DLA のやり方
・DLA の進め方（評価の基準について）
・DLA を研修することで、児童生徒の日本語の力をどのように読み取っていくのか。
・現場でどのように活用できるか。
・DLA の具体的な評価の仕方（悩むところがあるので）
・DLA の使い方
・DLA の評価視点
・DLA の評価
・DLA のやり方、その評価。
・DLA が実際に役立てられるように研修したい。
・DLA 実践のスキルアップ。

【DLA の活用の仕方】

・DLA の生かし方
・DLA など具体的な活用の仕方
・DLA の実施上の注意や活用の仕方が知りたい。
・DLA 評価後の活用
・評価がどのように日常の教育に活かせるのかを知りたい。

【指導方法について】

・日本語ゼロの子の日本語指導
・まったく日本語が話せない子どもに、より効果的な指導支援。
・言葉がわからなくて、自信が持てず自分から話すことができない子が、プレクラスは特に多いので、発話のヒントが見つかればいいと思います。
・日々の指導で行うとよいことは何なのか。
・日本語を楽しく身に付けさせる方法
・外国人児童生徒に対する日本語指導の方法
・日本語指導の具体的な実践演習。
・言語についての様々なアプローチ。
・具体的な指導技術
・様々なスキル
・効果的な日本語学習法について
・具体的な教え方
・日々の授業や生活に役立つスキルや情報
・具体的な（教科）指導方法。
・日本語指導という面で教科（算・国）指導をどのようにしていったらよいか。
・レベル別に具体的にどのような指導を行ったらよいか（初期はテキストが豊富で扱いやすいのだが）
・よりよい指導方法。

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

期待していたことと実際の研修内容は一致していましたか。（該当するものを〇で囲む）

ア	ほぼ一致	12 人
イ	だいたい一致	44 人
ウ	あまり一致していなかった	7 人
エ	全く違っていた	1 人

■全体としての満足度は高かった。その一方で、比較的経験年数が少ない参加者の中には「ウあまり一致していなかった」と回答した者が多かった。これは評価の裏付けになる日本語指導に関する基本的な研修を受けていないことなどの理由が考えられる。

・DLA を実施しても（現段階では）正確な診断ができるか不安だから。協議の際、経験のある方との診断に差があった。（経験年数０年）
・評価が人により分かれたが、何が正しいやり方なのかはっきりしなかった。（経験年数０年）
・DLA はかなり話せる子どもの話の質に関わるところが大きく、現在の本校の児童にあまりあてはまらない（今後は必要かもしれないが）（経験年数１年）
・評価のバラつきがあり、正しい評価ができているのか疑問が残ってしまった。（経験年数１年）

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動
（受講者アンケートⅢ②の回答より）

■言語観

・子どもの「話す」や日本語理解については、実際に話している場面以外にも広く日常や授業の様子から組み取ることの大切さを改めて教えられました。（経験年数３年）
・言語能力には、習得にかかる時間が違う３面があると知ることで、なるほどと思った。教科学習言語能
力をあげるために日々頑張らせていきたい。（経験年数未記入）
・DLA の言語能力観や話す力を３つの面で捉えることができることを知ることができた。

■DLA の評価方法について
＊経験年数に関わらず、研修内容に対する評価は概ね高かった。
＊アンケートの回答からは、以下の３つの観点からの意見が多かった。
・DLA の評価の方法がわかった
・DLA に取り組む意欲がわいた
・研修や演習の方法（形態）に対する評価

・ビデオでどのように取り組むか方法について知ることができた。（経験年１年）

・DLA のやり方と評価の仕方→どのようにやるかがわかったので実際にやってみたいです。（経験年数１年）
・テスト、評価の大筋の流れがわかり、利用する意欲がわいた。（経験年数２年）
・評価方法、他の教員と協力して実践したい。（経験年数２年）
・DLA 概論。話せるようになってきた子に診断シートをやっていきたい。（経験年数４年）
・DLA「話す」のグループ実践をすることで自分が現場に戻り、対象となる児童に対して評価をし、その評価に応じたその後の指導を考え、工夫することができると感じた。（経験年数未記入）
・実際にビデオを見て DLA を評価したところ。他の先生の評価と自分の評価を比べることができてよかったです。（経験年１年）
・後半のやり取りを文字に落とし込んで解説してくださった研修は参考になりました。主観で診断しないためには文字に落とし込み、客観的に判断し診断することが大切なんだなと感じました。
（経験年数１年）
・DLA で個人によって捉え方が色々あったことが、まず安心した。でも、参照枠だと概ね落ちついたことも安心した。（経験年数５年）
・評価について複数人で協議する必要性。人によっては捉え方が変わってくるので、話し合って再考することは大切。（経験年数７年）
・質的評価について、グループの中で他の意見を聞くことができてよかった。（経験年数１０年）
・実際に評価してみて、他の人の評価とどの程度違いがあったか知ることができた。（経験年数１１年）
・質的評価シートの考え方（経験年数１２年）

■「話す」力を伸ばす日本語指導の方法
＊講義と演習を行い（経験年数に関わらず）、いずれに対しても評価は概ね高かった。

【講義について】
・「授業では、どんな工夫をしたらいいのでしょうか？」以下の資料（経験年数０年）
・「話す」力を伸ばす日本語指導の方法が有効でした。教師の言葉の方が多くて、児童が少ないところは、通常学級の研究授業などでもよく言われますが、先生方がたくさんしゃべっちゃうのはよくないなと思いました。（経験年数１年）
・「話す」力を伸ばす日本語の指導、夏休み明けから実際に行っていきたい。（経験年数２年）
・「話す」力を伸ばす日本語指導方法を生かしたいと思います。（経験年数３年）
・築樋先生の講話（経験年数５年）
・指導、講評。教師の話の引き出し方もコツがあることがわかった。（経験年数５年）
・「話す力を伸ばす日本語指導」について参考になった。（経験年数９年）
・築樋先生のお話（経験年数１０年）
・話す力を伸ばす日本語指導を自分ができているかどうか考えさせられました。（経験年数１０年）

【演習（日本語のステージに対するロールプレイの作成）について】
・ロールプレイのシナリオ作りはやってみたいと思いました。（経験年数０年）
・ロールプレイ（ダイアログ）はとてもいいと思いました。（経験年数１年）
・日本語指導の方法でロールプレイの台本を作ったこと。こんな方法もあることがわかって勉強になりました。（経験年数３年）
・話す力を伸ばすロールプレイ、ロールプレイのシナリオ作り→もっとたくさんまとまった内容を話させたいと考えた。（経験年数５年）
・ロールプレイの研修、実際にやってみたいと思いました。単なる雑談になりそうなので、テーマを与えたいと思った。（経験年数５年）
・ロールプレイを通して日常生活で使う言語の練習をすることができるということ。子どもたちにとっても理解しやすく、身につきやすいものだと思った。（経験年数未記入）
・「話す」力を伸ばす指導、今後ロールプレイの資料を参考に実施していきたい。（経験年数未記入）

④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

【初期指導の方法】
・初期指導に対する対応の仕方。
・ほとんど日本語が理解できない児童への対応
・本校については話せない児童がぞくぞく増えそうなので、効果的な指導法が知りたい。
・生徒が話すスキルを身に付けるには、どのような指導をすればよいのか。

【授業研究】
・実際にどのように日々の指導を行われていらっしゃるか授業の様子を知りたい。その中で、役立てられる方法を知りたい。
・具体的な授業を見たい　・授業の例など見せていただきたいです。　・実際の指導の仕方

【教材】
・実践してよかった教材等の共有。
・リライト教材

【その他】
・経験があってもなくてもすぐに使える内容やスキル、明確な判断基準など。

④（**受講者追跡アンケート・研修会後に工夫や改善を試みていること**）

・経験年数に関わらず、研修後に何らかの工夫や改善を試みている。アンケートの記述も多かった。

・ロールプレイを取り入れている。（経験年数１年）
・DLA を実施し、強み（話す）弱み（語彙・語順）がわかったので指導法を少し改善しました。授業中の会話を増やし、それを元に文章を書くようにしました。（作文・体験のまとめなど）（経験年数１年）
・教科書の文中に出てくる語句について、画像や動画などを見せて理解を深めた。動作化。母語を交えて説明すると理解できるようだった。（経験年数１年）
・相談員など相談できる人に相談し、日本語指導に用いる教材を精選する。（経験年数１年）
・DLA をやった結果から、弱みを特に練習しようとした。（経験年数１年）
・なるべく板書や教科書の挿絵など、視覚的に訴えるように支援している。（経験年数１年）
・その生徒がつまずいている所を個別にサポートするようにしている。（経験年数１年）
・話すことに慣れさせるため、授業の初めに天気や曜日などの簡単な質問をしたり、休みの日にあったことを聞くなどの活動をするようにした。（経験年数２年）
・DLA「話す」の実施。⇒単語ではなく、文章で話す意識づけ、話型に当てはめて文章を書くトレーニング。（経験年数３年）
・DLA のやり方の動画を見ながら、児童に接して日本語のレベルを少し理解できた。（経験年数３年）
・DLA を実践し、生徒の実態について知るということを試みました。（経験年数３年）
・DLA をできるだけ多くの生徒に実施しようとしている。（経験年数３年）
・前回頂いた「ロールプレイ集」を使っている。視覚的支援を増やしたり、いくつかの言葉から合う言葉を選ばせたりと話しやすい環境作りを心がけている。（経験年数３年）
・DLA をした子を基準にして、取り出している子の力を推し量って、話型の必要性、５W の答え方、文を書くときにねじれがでないように帯学習で「いつ、だれ、どうした」を練習するようになった。子どものステージを見取って、授業の組み立てを考えています。（経験年数４年）
・中期の取り出しで、例えば「ことばのテーブル」の会話のロールプレイを使っている。会話の助詞、連文になれさせるため。（経験年数４年）
・授業で行った文型、言葉を使って話す内容を拡大していく授業構成。（経験年数７年）
・局部的な指導ではなく、応用力がつく文型指導が必要。（経験年数９年）
・帯時間を設けて、話の順序を学ぶ。学習言語がわからないときに、みんなで話し合ったり、動作化したりして意味を理解させる。（経験年数９年）
・DLA を実施し、個々の弱点に合わせ、教材と教え方を最適化。（経験年数１８年）
・生徒のレベルを意識すること。弱いと思ったところにあった教材を探した。（あまりうまくいっていない）　（経験年数２０年）
・９月以降転編入が多かったので、初期支援の時間に取り出す子が１０人を越えることになってしまったので、４月、５月に編入した日本語０の児童を普通の取り出し（授業時間が２０数時間だったのが１０時間くらいに減少）に戻す時に、DLA で日本語のステージを測定し、結果を次に指導する担当に連絡し、弱いところを理解してもらった上で教科支援をしてもらうことにした。初期支援（２００時間を目安に考えている）⇒（この場面で DLA の活用）⇒教科学習（学年の教科書を使った学習）　全体に話す力が弱いと感じたので、日本語を話す場面を多くとった学習やロールプレイなどを心がけた。（（経験年数２１年）

④（受講者追跡アンケート・教育に関わる者のキャリアとしう視点で「外国人児童生徒の教育・指導・支援」に関わる経験は自身にとってどのような価値・意味があるか）

・困っている人（子ども）に支援できることは、仕事としてとても幸せな仕事だと思います。未来ある子ども達が大人になるための手助けができることを嬉しく思います。（経験年数０年）
・様々な国籍の子とかかわることで、いろんな価値感や文化を知ることができる。（経験年数１年）
・言葉の壁があるが、どの子に対しても寄り添って関わるということは重要であると思いました。多くの先生方にも経験してほしいなと思います。（経験年数１年）
・日本語指導のみでなく、家庭の支援、クラスや学年との連携、進路指導など、学校の業務全てに関われるのが、日本語指導担当者であると実感している。若い先生は学校の業務を知りながら実践できるし、ベテランの先生は経験を全て発揮できる。日本語指導から学校の運営に関わることができる！学校では他の校務分掌に出入り自由な立場で、分掌の機構を考えると（運営委員会等で）なおありがたい。（経験年数１年）
・個に目を向けるやり方や手立てを知ることができる。相手のことをより知るために児童の母語を少し勉強するなどスキルアップ。（経験年数１年）
・外国人の生徒は今後も学級にいると思うので、そのような生徒の対応という意味でよい経験だと思います。（経験年数１年）
・年を取ってからの経験であったが、世界の子どもたちのために大切なものであると感じている。（経験年数２年）
・担当となるまで、外国人児童生徒の困り感までをあまり意識してこなかったが、彼らがどんなに大変かということを実感できた。外国人児童生徒だけでなく、どんな生徒にも個に応じた指導・支援が必要だということを強く意識することができた。（経験年数２年）
・勉強のわからない子の気持ちがわかった、（経験年数２年）
・多面的・多角的な見方ができるようになると思います。（経験年数２年）
・子ども１人１人としっかり向き合い、個に応じた支援を行うことの大切さや子どもたちの成長や失敗のすべてをポジティブな経験として捉えることの楽しさを感じることができる。（経験年数３年）
・外国人の児童、親の困っている事がわかり、彼らへの対応が変わってくると思います。（経験年数３年）
・全体の生徒と関わる中でも色々な条件の子を気にかけ学級経営をしていくなど意味深いものであると思う。（経験年数３年）
・色々な文化背景を持つ子が日本の生活の中でどんなところで困っているのか知ることができ、とても価値あることだと思います。今後外国にルーツのある子との関わりは必ずあると思うので･･･。（経験年数３年）
・視野を広げる。教師の幅も広がる。（経験年数３年）
・個に合わせた指導。日本語とともに日本の学習のスピードについていくために中学へなど先を見据えた指導の工夫。（経験年数３年）
・新たな視点で教科の指導や学校生活のつまずきを見ることができるようになった。指導方法も「みんながわかる」ための支援についてすごく考えるようになった。（経験年数４年）
・よりわかりやすく、楽しく学べる授業の展開。（経験年数７年）
・幅が広がる。どのような背景の生徒も生徒は生徒として指導する価値がある。（経験年数９年）

・「日本の学校が楽しい」「日本語が少しできるようになった」「国際教室で頑張ってできたら教室の勉強もできる（わかる）」という子どもの声を聞いて、子ども達のためにやってよかった、やりがいがあることだなと思った。（経験年数９年）
・DLA を学習したおかげで、その子にあった指導がより的確に行えるようになり、感謝しております。（経験年数９年）
・外国人だけでなく学力の弱い子にも役に立つ。弱い子の立場で考えられるようになった。外国人の子にわかるような授業ができれば、誰にでもわかる授業ができるようになる。（経験年数２０年）
・今はもう自分の使命だと思っています。（経験年数２１年）

（２）研修企画の立場から見た、研修の成果と課題
（企画者アンケートⅢの回答より）
・研修が専門的になればなるほど講師の選定に苦慮することになる。地域別、分野別講師の紹介などがされると随分助かると思う。

４．モデルプログラムについて
（１）養成・研修内容構成（報告書 pp. 72－76）について（意見）
・追加が必要な項目はないか。
・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か
・項目の数や具体性は適当か。

・非常に多くの項目が用意されていて、参考になった。そうした構成は、多様なニーズに応じることが可能である。しかしその一方で、『報告書』P77 に記載されているように「企画・実施する担当者は（中略）必ずしもその領域について専門的な知識・技能を有していない」ため、項目に記載されている専門的な内容を読み取ることが難しいかもしれないとも思われる。（自分の知識不足でそう感じた）

（２）モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）
・90 分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。
・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。
・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。

・「モチーフ型のプログラム」は、（プログラムによっては）時間数に対して専門的な内容が盛り込みすぎになっている箇所もあり、現実にはこのスケジュールでの実施が難しいと感じるものや、このスケジュールに倣って実施した場合の成果があまり期待できないと感じるものもある。例えば、P235 のドナルド・ショーンの「省察的実践家」などは大切なことは十分理解できるが、プログラムで書かれているように 20 分で伝えることが果たして可能だろうか。現場の先生方に伝えて実践

につなげて行くには、研修講師の力量が求められると感じる。

・教員研修では、講義と演習を組み合わせて行う場合が多く、より詳しい演習例があると助かる。

（３）モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。
・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。
・複数回の研修の場合には、各回の関連付けがしやすくなったか。

●豊橋市の教職員研修の体系

研修を、その性格と内容とから「校内研修」「基本研修」「職務研修」「研究部等研修」「課題・専門研修」「特別研修」に分類する。

１．校内研修

２．基本研修
市教育委員会が統括する。義務研修ともいわれるもので、経験年数、職務に応じて、該当する教職員が研修の義務を負うものである。

３．職務研修
役職や職務に応じた意識の高揚と専門的な実務能力を高める研修を行う分野

４．研究部等研修
市現職研修委員会が統括する。教科等研究部を組織して、自主的主体的に研修を進めるものである。

・専門研修
研究部に関わる教職員の専門性や指導力の向上を目指して、企画（各研究部）・運営（全体的）する研修の分野

・自主研修
各研究部のテーマのもとに、課題の解決に向けてグループ等を組織して研究する分野

・研究部研究大会
各研究部の１年間の研究の成果を、研究部員が一堂に会して協議する分野

５．課題・専門研修
市教育委員会が統括する。教職員の専門性を高めるために行うもので、自主的な受講を基本とするものである。

６．特別研修
市教育委員会、市現職研修委員会が共同で統括する。
特定したことについての研究・研修を進めるものである。

・今回の研修は、上記の研修の「４．研究部等研修の一部で、教員が自主的主体的に研修を進めるもの」の中の夏季研修会である。なお、今年度の研究テーマは「日本語を学ぶ楽しさを感じながら、自分の思いや考えを伝えようとする子どもの育成」、授業研究会は「中学３年生の日本語指導　技能別日本語「話す」「聴く」～届け！僕たちの思い～日本語スピーチコンテストへの道～」である。

研修全体の流れ

	専門研修	自主研修	研究部研究大会
4 月	第 1 回教科等研究部全体会		
5 月			
6 月 29 日	研究部研修会 **DLA**「はじめの一歩」を実施		
7 月	夏季研修会	授業案検討会	
8 月			
9 月	9 月から 11 月にかけて、各自が DLA を実施し、その評価を参考にして指導を行い、レポートを提出する	授業研究会	
10 月		レポート作成	
11 月			
12 月			研究部研究大会
1 月			

（4）モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

・年間の研修計画や、数年の研修計画など、長期的に研修を考える場合に、こうしたモデル・プログラムを組み合わせることができ、有効だと感じる。